



Title	過疎地域における自律的地域づくりにむけた地域住民の協同形成：新潟県十日町市山間部集落・枯木又の取り組みを事例に
Author(s)	吉田, 弥生
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 135, 1-25
Issue Date	2019-12-23
DOI	10.14943/b.edu.135.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76406
Type	bulletin (article)
File Information	04-1882-1669-135.pdf



[Instructions for use](#)

過疎地域における自律的地域づくりにむけた 地域住民の協同形成

—新潟県十日町市山間部集落・枯木又の取り組みを事例に—

吉田 弥生*

【要旨】 本稿は、過疎地域において自律的な地域づくりにむけた住民の協同が内発的に生成・発展する条件の考察を目的とする。

そのために、第一に、岩崎（2010）の「場の教育」論で示された「諸事象の自分事化」を可能とする学習の内実の検討、第二に、「場の構造」を作り変える学習実践の展開論理の検討を行った。対象事例に、「枯木又エコ・ミュージアムの会」が結成に至る過程を取り上げた。

分析の結果、自己や地域をまなごす空間軸の視点の拡張によって、地域資源をほりおこす視点形成されること、時間軸の視点の拡張によって、地域づくりの当事者性が形成されることが明らかとなった。鍵となる条件は、住民自身の生活に即した学習だった。

以上の学習から住民の多様性や固有性を学び合う意義が確認され、誰もが対等に参画できる地域づくりの必要性が導かれた。そのために、客体化した人々のエンパワメントが求められ、それこそが住民の協同形成の契機だと考えられる。

【キーワード】 過疎地域 地域づくり 協同 エコ・ミュージアム 生活文化

1. はじめに

(1) 問題の所在

本稿の目的は、過疎地域において自律的な地域づくりにむけた住民の協同が内発的に生成・発展していく条件を考察することにある。そのために、新潟県十日町市の中山間地域にある地域づくり団体「枯木又エコ・ミュージアムの会」が結成に至るまでの分析から、地域に根ざした学習を通して地域住民が形成する地域づくりの展望と協同実践の相互関連を明らかにする。

全国的に過疎関係市町村数は増加し続けており、その割合は47.5%¹と全市町村の半数近い。その多くは、高度成長期に始まった過疎化に歯止めがかかるとなく現在に至っている。これまで抜本的な対策はなされずにきたが、近年推し進められている「地方創生」政策では、地方自治体や地域社会が自ら人口減少対策や地域課題に取り組む主体性を要請している点²に特徴がある。

しかし、過疎地域では人口の増減というより、それによって引き起こされるコミュニティ機能の低下や行財政の危機、さらにそれに伴う住民の無気力化や諦め（「誇りの空洞化」）により、人口減少に歯止めをかけられなくなるという過疎化のメカニズム総体が問題とされてきたことは、周知のとおりである³。この指摘を踏まえると、現在の政策は過疎問題が起こる地域社会の構造的困難を捨象して、地方自治体や地域住民に自助努力を強いるものと言える。

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.135.1

このような視点からの過疎対策では、地域課題に「自主的」に取り組めない地域は自己責任論で切り捨てられたり、「自主的」に課題解決するように地域住民が動員される動きが加速しかねない。多くの論者が提起するように、「人間性の復興」を探求することと切り離さずに、地域住民が自律的に地域社会を再編して持続可能性を高めていくことができるような支援のあり方を見通さねばならないと考える⁴。

(2) 本稿の課題 ～過疎化の悪循環を断ち切る焦点～

高度成長期以後、過疎問題が明らかになるにつれ「このマチにはなにもない」「地域づくりなどできるわけがない」といった地域社会に対する否定的認識を乗り越えようと、「心の過疎」からの脱却が多くの地域で掲げられてきた⁵。このような実践の動向に呼応して、先述した過疎化のメカニズムを断ち切る方策を検討しようとする研究が行われてきた。これらの研究では、地域住民の都市志向型価値観を転換させることが焦点とされてきた。その方策としては、「農村の生活規範」の価値を「文化的知識人」が啓蒙的に指導するという外在的アプローチが提起されてきたが⁶、近年、小田切徳美によって、地域の歴史・文化、自然など身近なものから、「暮らしのものさし」を積みあげていく地域内在的な活動こそ、当事者意識の醸成と「自らの暮らしをめぐる独自の価値観の再構築」につながる可能性が指摘されている。また、その具体的な取組の新たな手法として、「地元学」(地域づくりワークショップ)と「都市農村交流」が着目されてきた⁷。しかし、これらの取り組みが必ずしも当事者意識の醸成や独自の価値観の再構築につながるわけではない。例えば、地元学実践では、地域住民の学びを支援する役割の「外の人」が地元住民の意思や関心を尊重しないため、地元住民の主体性が十分に引き出されず活動が地元根付かないことや、調べても「活用する」ことへつなげられないために活動が停滞しがちであることが報告されている⁸。都市農村交流においても、都市住民や自治体による消費的・政策的まなごしにふりまわされた農村が「交流疲れ」を深刻化させており、交流が地域づくりに資するものとなっていないケースの増加が確認されている⁹。

これらは、住民意識だけに焦点を当てる実践や理論の限界を示している。外部からの啓蒙や交流を通して地域の価値を意識化するだけで、地域づくり実践が生み出されるとは限らない。これらの先行研究では、地域社会における生活・生産のあり方を持続可能なものへと作り変える実践と住民意識との関連が問われなかったため、地域住民が自律的な地域づくりを展開していく条件の解明には至っていない。

住民意識と地域社会の構造の関連理解において注目しているのが、岩崎正弥の「場の教育」論である。「場の教育」とは「地域における、土地に根ざした学び」であり、「自律と地域間連帯」に根ざした地域再生にむけて「住民が地域を知り、地域を育てる方法」という。岩崎は、「場」の理念的原義を「<開かれ、(活動を：筆者注)生み出し、(異なるものも：筆者注)包み込む>という特質をもつ空間」とした上で、場を<認識としての場>と<構造としての場>の2つに分け、これらの関係性で「場の教育」を説明している。すなわち、場の教育とは、認識としての場に立ち(=「認識の一定の到達点に達」して)、他人事的な事象の自分事化が生じるように学び手の認識をかえるものであり、その結果学び手は地域づくりの担い手として、構造としての場(=「固有の住環境が持つ固有の雰囲気」であり「時間と関係と空間の総体」)を変える活動を起こすようになるという。また、構造としての場は、可視化されたもの(自然環境や人工環境)と不可視なもの(文化、伝統、地域社会の仕組み、SCなど)とが絡

み合って存在している¹⁰。

岩崎は、想定される「場の教育」の四段階プロセス¹¹を次のように整理している。それは、【①自地域を知る→②諸事象の価値化（気づき1）→③諸事象の自分事化＝身近化（気づき2）→④自律と地域間連帯のための活動（→さらに、新たに形成された場が地域住民をこの気づきのプロセスに誘う可能性がある）】というもので、①から③によって引き起こされる地域認識の転換が④の地域づくり実践を生み出すという論理である。その特徴は、地域の価値を知るだけでなく「諸事象の自分事化」まで認識を深めることで、活動を生み出す主体が形成されると指摘したところにある。

また、地域に多種多様な活動を生み出すためには、既存の「場の構造」を変える必要性を指摘している。ここでの「場」とは＜構造としての場＞を指しており、疲弊した多くの地域でみられる、ルーティン化した活動が縮小再生産されて既存の場の構造を強化することを「停滞のサイクル」に陥った状態とみた。それは、「地域そだて」という「人びとが広義の地域資源に働きかけ活動を導き出す」一連のプロセスにおいて、構造としての場が人びとの制約要因として機能し活動を起こすに至らないことだとされる。

そして、「停滞のサイクル」から脱出するには、活動によって構造としての場に働きかけるしかなく、その起点として重要なのが「インフォーマル・キーパーソン（IKP）」であるという。IKPとは、必ずしも役職者ではないが「地域そだて」のプレイヤーおよびプレイヤーとなりえる存在であり、岩崎は農村女性など「既存の場からはじかれている人＝社会的弱者」という属性、つまり地域社会の周辺層に可能性を見ている。なぜなら、はじかれているがゆえに異なる価値観を持つ人々が新しい活動を起こすことで、ほかの人々も気づきを得て認識を転換させるという意味で構造としての場を変容・活性化させる可能性があるため、その意味で周辺層を地域そだての担い手として取り込むことが極めて重要という。IKPを育てるためには、地域に学ぶことで諸事象を自分事化する学び（「意識啓発」）がなされたうえで、担い手のニーズに合った多種多様な活動が起こせるような学びのプログラムに公的承認機能を付与した「専門機関による具体的な活動支援」が不可欠であり、そうすることで担い手として可能性のある周辺層がほかの住民から認められて活動しやすくなるとみている¹²。

このように「場の教育」論では、地域内在的な学習を深めることで地域住民の主体性が発揮されていく学習プロセスの各段階が仮説的に整理されたこと、さらにこのプロセスを地域社会において実現し豊富化するために「場」のあり方に着目したことは、地域に根ざした学びによる主体形成と、その主体による自律的地域づくりの関連を明らかにするうえで重要な前進である。

しかし、岩崎の論では、「諸事象の自分事化」に到達する（＜認識としての場＞に立つ）ための条件が必ずしも明らかでないこと、また、「構造としての場」の把握が抽象的なものにとどまるため、それがいかんして変容・再活性化するのか具体的に明示されていないという限界がある。

特に後者に関して、「場」をどのように捉えたらよいか。より具体的に検討するために本論文では岩崎の定義を敷衍してみたい。＜認識としての場＞に立つとは、間近な事象Aを自己の経験の延長線上に位置する身近な事象A'に変換する認識空間を発見することであり、＜構造としての場＞とは、時間と関係が深く刻み込まれている空間である「固有の住環境が持つ固有の雰囲気」、すなわち、「時間と空間と関係の総体」であり、それは文化や地域社

会の仕組みなどの形で存在すると述べられていた。また、認識としての場と構造としての場は、連動して変容するという¹³。ということは、構造としての場は、文化や地域社会の仕組みを媒介として、地域住民の共有する認識枠組み、特に、時間・空間意識のあり方、社会関係のあり方に関する認識や規範意識を規定すると考えられる。したがって、場の構造の変容とは、地域住民が共有する認識枠組みや規範が再構成される過程として捉えられるのではないだろうか。そして、「諸事象の自分事化」に至る学習が集団的に行われることが、場の構造の変容を引き起こすことにつながると考えられる。

そのように考えると、「停滞のサイクル」論では既存の場の構造を変容させることが焦点とされていたが、その変容は容易くない。なぜなら、それは地域住民の日常意識の拠って立つ基盤として歴史的に形成されてきたものだからだ。しかし、過疎化のような社会変動によって地域社会の実態と場に齟齬が生まれたとき、旧来の場に固執し続けるなら「停滞のサイクル」に陥ってしまう。したがって、地域社会の衰退に伴って場の構造が機能不全化した際、持続可能な地域社会を自律的に作り出す場の構造へ再構成する論理を明らかにすることが次の焦点となる。

以上から、本論文の課題は、第一に、地域づくり主体の形成において、「諸事象の自分事化」を可能とする学習の内実を明らかにすること、第二に、それと相互規定的に進展すると思われる、場の構造を作り変える学習実践の展開論理を明らかにすることとする。これらの検討を通して、過疎地域において住民の自律的な地域づくり実践が協同的に展開する条件を考察する。

(3) 分析枠組み

(2) で述べたように、事例分析では、場の構造が反映すると考えられる住民の認識枠組みや規範意識に注目し、どのような活動を通してそれらが再構成されていくか、その学習過程を分析していくこととなる。

分析にあたって以下の三点に留意して検討を進めることとした。第一に、場の構造を変容させる起点となりうるIKPの属性として着目される、「社会的弱者」の視点である。その可能性を検討するため、本論文では、地域社会の周辺層の取り組みが起点となった実践に着目し、彼らが、いかなる学習活動を経て、どのように地域認識と当事者としての自己認識を深めて「諸事象の自分事化」に到達して活動を生み出し、場の構造の変容を担う主体として形成されるのか、さらに、ほかの住民といかに協同していくのか、分析していく。

第二に、「場の構造」の捉え方である。先述の通り、地域住民の自己認識・地域認識を規定するものとして、住民の時間・空間意識、社会関係についての認識に着目することが手掛かりとなると考える。よって、場のあり方の住民意識への反映として、時間・空間意識、住民の関係性理解、これらに基づく地域づくりの展望に着目して、場の構造の変化を検討する。

第三に、構造としての場と認識としての場が相互に連動しているならば、住民が新たな認識としての場に立った(=新たな場が見出された)場合、それに基づいて地域社会の仕組みや文化を再構成しようとする働きかけが起こると考えられる。その営みは、地域づくり実践と理解できよう。よって以下の分析では、住民の地域づくりに対する課題意識の質の変化を実践形態の変化にみて、場の構造が変容する局面として時期区分する。

(4) 調査事例の位置づけ

以上の検討に際して、新潟県十日町市の中山間地域にある地域づくり団体「枯木又エコ・ミュージアムの会」が結成に至るまでの事例を対象とする。本事例は、深刻な過疎化により人口減少が進む地域において、地域社会の周辺層である女性や青年の学習が起点となって新たな地域づくりの展望が生み出され、その展望の実現にむけて地域内外の人々との協同実践が展開されてきた取り組みだからである。

「枯木又エコ・ミュージアムの会」(以下、「エコの会」とする)は、「枯木又地区の自然や文化・歴史・産業に根ざしたエコ・ミュージアムを創造し、守り育てていくこと」を目的とする団体として1995年に結成され、現在まで様々な地域づくり実践に取り組んできた。会の構成は、枯木又在住の地元会員と枯木又在住でない会員(「一般会員」と賛助金を負担する「賛助会員」の2種類)からなる。地元会員は集落の全戸が加入しており、男女問わず、子どもから高齢者まで活動に関わってきた。地元外の会員は、活動方針に共感する離村者や十日町市民、都市住民などであり、地元会員とともに運営に携わる者からたまに参加する者までかわり方は多様である。

以下で中心的に分析する1950年代～1990年代の地域の概要を確認する。枯木又は標高450mの山間部に位置し、近隣の集落とも数km離れていたため、平成の大合併(2005年)以前は「十日町の最も奥の地」と称されていた。戦後、地域住民のほとんどが農業(コメ)を主たる生業としていた。十日町市周辺では、地理的隔絶度が高い山間地集落ほど封建的規範が強く年長者の一部の男性のみが地域社会の意思決定を独占する風潮があり、枯木又はそのような傾向が特に強かった。高度成長期に入ると、十日町市では激しい人口減少が始まり、枯木又も同様に過疎問題に悩まされてきた。それ以降、集落に残った者は、出稼ぎや出機内職に追われるようになっていった¹⁴。

表1 枯木又の戸数推移

1960年	1965年	1980年	1985年	1993年	2001年	2019年
48戸	39戸	28戸	24戸	18戸	16戸	8戸

(『枯木又をしらべる』1-3, 1975～77年度, 『枯木又のうた』1994年, 聞き取りより筆者作成)

続いて、分析対象とした時期に存在した地縁組織の概要について述べる。集落運営を担う組織として「常会」(又は「部落会」と呼ばれる)が枯木又地区内に二つあり、「東枯木又」、「西枯木又」に分かれて運営されていた。常会は、世帯主一名ずつ(年長男性)で組織された。そのほかの地縁組織には、老人会、婦人会、青年会がある。老人会は60歳以上の地域住民の団体である。婦人会(のちに「枯木又母の会」に改称)は枯木又地区全体の各世帯の既婚女性一名ずつで構成され、婦人学級や地域奉仕活動に取り組む団体である。青年会は枯木又地区全体の15歳以上45歳未満の青壮年で構成され、青年学級や集落行事の企画運営などに取り組む団体である¹⁵。

厳しい生活条件と封建的規範が強かったにもかかわらず多様な人々の協同によるエコ・ミュージアムの地域づくりが生み出されたのは、後述する婦人学級の地域に根ざした学習・

文化活動や、青年会の人びとが行っていた都市住民との交流を起点とした活動の積み重ねによるものであるが、彼ら・彼女らは地域社会の権力構造のなかで周辺的存在である。彼ら・彼女らの長年の活動がなぜ地域ぐるみの実践へと結実したのか、以下では両団体の活動に即して地域住民の学習過程と協同的關係の広がりを明らかにしていく。

両団体では、公民館主事などの支援者から、枯木又の住民の生活課題・地域課題をふまえて活動への助言や提案があり、地域づくりの課題の質の変化によって新たな学習実践が生成してきた。団体によって実践の時期に多少ズレがあるものの、地域課題の変容に即して実践形態は三期に分けられた。すなわち、地域社会の閉鎖性・封建性に対する学習活動が行われた第一期、急激な過疎がもたらした地域社会の衰退に対する学習活動と地域づくり実践が行われた第二期、第二期を基盤にエコの会結成にむけて住民の協同形成が目指される第三期と分けることができた。各期の実践に基づいて自己認識・地域認識が変容し、それに伴い地域づくりの展望も変容していた。その要因として、時間・空間・関係に関する認識枠組みは①「今・ここ」という局所的視点→②「過去－未来」・「都市－農村」という時間軸・空間軸が拡張した視点→③固有性の視点への変化が確認できた。また、それに応じて地域づくり主体としての住民の関係性と地域づくりの展望も、①共感的関係に基づく同じ属性の住民集団による日常の改良→②協同的關係に基づく同じ属性の住民集団による地域づくり→③協働する様々な属性の住民集団による地域づくりと区別できた。(表2)

分析にあたっては、地区公民館で発行された学習記録・生活記録文集、中央公民館や市の広報物、「枯木又エコ・ミュージアムの会」の会報紙である「枯木又クォーター」等の出版物、婦人学級経験者2名とエコの会役員の地元住民6名へのインタビュー（2013年、2015年、2019年）をデータとして用いる。

表2 事例の時期区分

	第一期	第二期	第三期
地域課題	地域社会の閉鎖性・封建性	急激な過疎によるもたらされた地域社会の衰退	地域づくりにむけた住民の協同の形成
学習実践	<婦人学級> レク・話し合い・生活記録・俳句 (1962年～) <青年会> 都市農村交流 (1962年～)	<婦人学級> 地域を調べる学習(1975～78年) →影絵制作・上演, 版画絵本製作 (1979～98年) <青年会> 都市農村交流「20周年行事」 (1992年)	<エコミュージアム準備委員会 →エコの会> 地域内外に地域づくりの展望を 発信する多様な属性の住民の参 画をはげます支援 (1993年～)
主体の時間・空間意識	今・この視点	過去－未来の視点 都市－農村の視点	第二期に同じ
主体の関係性	同質集団による共感的仲間 関係	同質集団による地域づくりにむ けた協同的關係	多様な属性の住民による地域づ くりにもけた協同的關係 (住民を属性ではなく「固有性」 に着目して対等にとらえること による)
地域づくりの展望	日常の改良	・地域アイデンティティを未来 に受け継ぐ ・多様な視点で地域資源をほり おこし活用する ・ともに学び合い楽しむ	・第二期で形成した展望の実現 ・発信を続けて地域内外と対話 的關係を広げる

2. 事例分析

(1) 第一期

第一期は、山間地集落ゆえ地域社会に色濃く残存していた閉鎖性・封建性に対して、枯木又分校（飛渡第二小学校の分校）の教師や枯木又を含む飛渡地区の地区公民館主事が学校教育・社会教育において教育事業を計画し、地域住民はそれらの事業に参加したことを契機に、自分たちの日常生活や地域社会を対象化しはじめる局面である。また、高度成長期に入っていく時期であり、枯木又の男性（世帯主、青年）は出稼ぎを始め、女性（姑、嫁）は出機内職する者が急増し、過疎化も進行し始める。

1) 枯木又分校と地区公民館の関係

1955年に枯木又分校の教師として当重夫妻（夫・益郎氏、以下では集落における通称である「男先生」を用いる。妻・菁子氏、以下同様に「女先生」を用いる。）が赴任してきた。男先生は、「不利な条件を有利な条件へ」という言葉を信念とし、枯木又の地域特性を活かした教育を推し進めた。山間地の閉鎖性に危機感を感じた当重夫妻は、地域住民に対して教員住宅の一部を開放して子どもから大人まで交流し、封建的な慣例の見直しを提起するなど、熱心に「へき地の生活改善」に取り組んだ。当重夫妻の地域に根ざした活動を地域住民は受け入れ、彼らを慕った。社会教育に関しても、男先生は青年学級の学級主事と講師を兼務で担い、女先生は婦人学級のリーダー的存在であった。地区公民館主事は、枯木又で事業を行う際、基本的に当重夫妻の協力を得ながら進めていた。かれらの活動によって「分校は公民館であり、集会所でもあり、何でも相談の場」、「地域の文化施設」といわれるほど、枯木又の住民にとって文化の中心となっていた¹⁶。

2) 婦人学級の開始一日常生活の対象化と仲間づくり

1962年、枯木又で文部省委嘱婦人学級が開設され、婦人会会員約40名が参加した¹⁷。婦人会会員と婦人学級生はほぼイコールであったため、姑がいる家の嫁は、姑が婦人会活動から引退するまで参加しなかった。つまり、参加者は高齢などの理由で引退するまで基本的にはずっと婦人会・婦人学級に参加し続けた。参加者の年齢層は幅広く20代～60代であった¹⁸。当集落では、嫁いできた女性は「家の中にしばられていることがあたりまえ」という風潮が強く、彼女たちは自由な外出が難しかった。よって、婦人学級はこの地域の女性が交流できる唯一の場であり、公民館という「おおよけ」から求められた集まりであることから家人の許可が下りやすかったため、彼女たちは積極的に参加した¹⁹。

学習内容は、一年ごとに学級生の話し合いで年間テーマを決めた上で、地区館主事が具体的な学習内容を編成した。例えば、初期の年間テーマ（1966年度）は「明るい家庭」で、内容は、子育てや食生活等に関する「話し合い学習」と称した交流会、映画鑑賞などのレクリエーション、栄養士・農業改良普及員らによる講話を聞く学習が中心であった²⁰。

3日目から、学級活動に加えてノートの「廻しがき」も行われるようになった。それは、ノートに生活記録を一人ずつ記して回覧し、年度末にそれを婦人学級文集「またたび」として発行する活動である。文集の内容は婦人学級の感想や、生活の中で感じていること等が中心的で、生活記録・俳句・詩と各人が好きな形式で発表できた。完成したら、各自で目を通した。

初期の文集では「農村の主婦にふさわしく健全な家庭をつくる様に努力致したい」「少しでも勉強してあまり世の中に立ちおくれな様にならば行って行きたい」「皆々の力で明るいゆ

たかな村をつくる事にしよう」²¹という婦人学級や地域生活への意気込みに加え、婦人会トラブルの解決案、豪雪による困りごと、子育ての悩みや出稼ぎの心細さなど、彼女たちの身の回りの生活課題がつつられた²²。

1974年の婦人学級では、地元の俳句名人による講話で、昭和初期から続く枯木又の俳句グループが過疎で窮地に陥っているという話がなされた。すると、一部の学級生がそれまで我流で文集に俳句を寄せていたことから、枯木又の俳句文化を再び盛り上げようと、講師と高齢の学級生12名で「かあちゃん俳句の会」を結成した。会のメンバーは農作業や機織りの合間、豊かな自然や暮らしを題材に俳句作りにいそしみ、月一回の句会を開催した²³。句会に参加すると、「ここで生まれ育った人たちが気づかないでいる良さを指摘し、認識させられることがたびたび」²⁴あったという。彼女らの句は、「生活の記録であり、生活の中からにじみ出た生の叫び」が表れたものだと講師達から評価された²⁵。この俳句会は、メンバーの高齢化による離村・死去で解散するまで10年弱続いた。

このように、婦人学級での話し合い・文集製作・俳句会などの学習活動を通して、婦人学級内に限定されるものの、彼女たちは思いを表現する方法と共有し合える関係性を育んでいった。その関係性を基盤に、婦人学級生は日常生活を対象化して、自身の生活の悩みに関連した地域の問題点、自分の感性でとらえた生活の中の感動について、互いの着眼点を学びあい励ましあう様子が確認できる。すなわち、地域の価値を知る学習段階といえる。一方、彼女たちの間で日常生活の苦労が共有されても、それに対する提起はあくまで改良的視点であり、地域社会の生活のあり方を現状維持する範囲内での主体的対応にとどまっていた。

3) 集落青年と都市住民の交流のはじまりー生活の楽しみを見出し共有する仲間づくり

1962年、分校の男先生は、「山の中の僻地だからこそ外の世界に触れることが大切」と考え、教育実践の一環として新潟市内の大学生・高校生による団体「新潟子供の会」の「へき地慰問」を受け入れた²⁶。この慰問は、夏休み中の5日間で行われた。新潟子供の会のメンバーは、昼に分校の子どもたち42人に勉強を教えたり遊んだりして、その合間に各家庭を訪ねて大人たちとも交流した。夜には分校で枯木又の人々と新潟子供の会の演芸会を行った²⁷。慰問が終わっても、新潟子供の会と子どもたちの間で文通が行われ、子どもたちも親も交流を続けた。この取り組みは「辺地の子供にとって一年間を通じてたった一つの楽しみ」と地域住民から大変好評を博した。交流は断続的に1980年頃まで続いた²⁸。

1969年からは、首都圏に住む新潟子供の会OBのA氏が度々訪問するようになった。枯木又の大自然や地域住民の「地に足をつけて」生きてこられた人生の確かさ²⁹に感動した彼は、「枯木又」という空間の魅力や教育的な価値に惚れ込み、1972年から自身が経営する学習塾の子どもたちを連れてくるようになった。ちょうど同年、A氏が最初に交流した小学生たちが高校を卒業して農家の後継ぎの青年として集落に戻っていた。そして、A氏が連れてきた都市の子ども達に、枯木又の青年がお兄さん役として「都会ではできない遊び」をしてあげたり、農作業や地域行事に参加させてあげる関係が生まれた。塾関係者の訪問は回数を重ねていき、成人した元塾生が集落の子どもたちの面倒を見るような「関係が共に重なり合いながら織り成していく」状況が生まれていった³⁰。他方、青年たちはA氏らとの交流を通して、枯木又にみられる絶滅危惧種植物の存在など、この地域の自然の価値を教えられた。青年たちにとって、都市住民が枯木又という場所・人を求めて継続的に訪れること、地域にある価値あるものを教えられること、ともに遊び、歌い、飲み語らう仲間ができたことは、生活の中の大きな

楽しみのひとつとなった³¹。当時、枯木又も周辺地域と同様に過疎が進行していたが、この交流があったことで青年同士は和気藹々とした関係を築き、地域の雰囲気についても「暗い感じはなかった。(みんなで)楽しくやっていた。」と感じていた。

交流が継続して1989年になると、元住民のひとりがA氏に土地を提供して、それまで拠点として毎年作っては畳んでいたプレハブ小屋を止めて家を建てるよう勧めたため、都市住民と枯木又住民の交流拠点となる一軒家が建てられた。建設にあたっては塾関係者と新潟子供の会OBが中心的に出資したが、長年の付き合いがある青年たちも「枯木又青年会」として出資金集めに協力した。その理由として、青年たちにとって交流が生活を充実させるもので継続したい思いがあったことも大きい。それに加えて、枯木又に価値を見出す人びとの存在を実感したことで、このような交流がいずれ移住者獲得につながるかもしれないという期待もあり、地域としてこのような交流を深める意義を確信していたからだった³²。

このように、青年たちにとって都市住民との交流は、日常生活では得られない刺激を与え、視野を広げてくれるものであった。特に、枯木又の生活や豊かな自然に対して肯定的評価が与えられる機会だったため、都市の視点から枯木又を捉えることで地域の価値が見えてくることを知る契機となっていた。また、都市住民との交流の楽しさを共有する青年たちは、ともに遊び楽しむ仲間としての関係性を築きつつ、この交流を発展させていく地域づくりを志向していった。しかし、この段階ではあくまでも青年たちの個人的な付き合いとして交流が行われるにとどまっている。

4) 小括

第一期では、閉鎖性・封建性が強い地域社会のもとで、地域内外とのつながりを持ちにくい者たちが関係性を構築し、地域の価値を学び合う／知る段階だった。婦人学級生は、話し合いや生活記録、俳句を通して日常生活を対象化し、互いの生活の苦労や喜びを学び合ったことで共感的関係を育んでいた。しかし、一般的な生活記録実践に含まれる読み合いのような、互いの実感を突き合わせて理解を深めるような学習は行われなかったため、現状の生活をより良くする方策を模索しつつも批判的検討はなされず、旧来からの規範にのっとり農村の嫁として現状維持的に努力する方向性にとどまった。ただし、そのような方向性が選び取られたことは、嫁いできた女性たち(嫁という属性)が封建的規範によって主体的に生活をつくりだす自由が地域社会の中で最も制限された立場に置かれており、変革的発言や行動が非常に困難であったことに留意して理解すべきであろう。よって、女性たちは〈今・ここ〉で共有されている強固な規範の範囲内でしか主体性を発揮できず、自己の役割や地域社会の可能性をその中でしか認識・表現できなかつたと考えられる。

青年たちは、長年の都市住民との交流を楽しむことで仲間意識を育みつつ、彼らがなぜ枯木又を評価しているのか知るにつれ、自然そのものや自然とともにある生活の価値を学んでいた。都市住民の枯木又への視点を理解し始めたことで、人口減少のさ中でもネガティブな地域認識に陥らなかつた。よって、青年たちは自然を活かした交流という地域づくりの展望を描きはじめることが可能となった。なぜならば、〈今・ここ〉の枠の中だけで自分たちや地域のあり方を捉えるのではなく、都市―農村という空間軸の視点が形成されつつあったからと考えられる。

このように第一期では、形成された地域づくりの展望の質が若干異なるものの、両者ともに地域社会のあり方に意識的に問題提起するほどの活動には至っていない。しかし、地域社会

の周辺層が、学習活動や交流を通して互いの思いを学び合い楽しむ仲間関係を育んだことは、地域社会でそのポジションゆえの視点を意識化する上で重要である。岩崎は、「既存の場からはじかれているがゆえに、異なる価値観をもって新しい活動を起こすことが場を変容・活性化させると述べるが、そもそも周辺層に位置づく地域住民に孤立や分断があるならば、周辺層が共有する価値観など意識化できないのだから、IKP論の前提条件として同じ属性の仲間集団を形成することの意義を位置づける必要性を指摘できるだろう。また、その仲間を過ごす時間が解放的で楽しさを感じられるものだったことは、彼／彼女らの活動が継続していく重要な要素といえる。

(2) 第二期

十日町市の山間部では、高度成長期に入り1960年からの10年で専業農家戸数が81%減少し、急激に兼業化が進んだ³³。つまり、農業だけで生活していくには困難な状況となっていた。近隣の山間部集落と同様に、枯木又においても離村者が増加し、残る家では出稼ぎや内職が常態化していった。1970年代半ばに急激な人口減少はおさまるものの、ゆるやかに過疎は続いていた。枯木又の戸数は、高度成長期前の約3分の2になっていた。地域生活にも影響が出始めて、人手不足から地域行事が簡略化され始めた。第二期は、このような過疎化による危機的状況に直面しながらも、婦人学級と青年会のメンバーそれぞれが学習活動を通して新たな地域づくりの展望を形成していく局面である。

1) 婦人学級における集落の文化・歴史を調べる学習

人口減少の影響が地域生活にみられるようになり、婦人学級生たちは集落の今後を不安視していた³⁴。そこで地区館主事は、婦人学級の年間学習主題を決める打ち合わせで、「枯木又の将来を考え、枯木又を伸ばしてゆくことを積極的に考えてゆく婦人達になってほしい」「枯木又の将来をみんなで考えてみよう」という動機づけを行った。学級生たちは話し合いで「枯木又の過去のことを知らずに、将来は考えられない」、「枯木又の昔のことを、身近なことから調べてみよう」との意見でまとまった³⁵。こうして、年間学習目標に【①枯木又を良く知り、理解する。②調べることになれる。③話したり聞くことになれる。】が掲げられた。この学習の特徴は、自分たちの「現在」の生活と関連付けながら地域の一昔前の歴史を自ら調べて理解するところにあるといえる。

学習の進め方は、4グループに分かれ、各自が自宅の高齢者に聞き取りをして調べてきたことをグループでまとめて、全体学習日には専門家の話を聞いて基礎知識を深めつつ、全員で話し合っまとめていく形式をとった³⁶。

表3 「枯木又を調べる」主な学習内容

一年目	二年目	三年目
<ul style="list-style-type: none"> ・年中行事とその料理 ・女のくらし ・救急手当と予防法 ・年中行事の生い立ち ・農作業・野菜の移り変わり ・子どもの頃の遊び ・あそびうた 	<ul style="list-style-type: none"> ・枯木又の歴史年表 ・地蔵様の由来と伝説 ・東枯木又・西枯木又同族系譜図 ・夜逃げ―出稼ぎ― ・冠婚葬祭 	<ul style="list-style-type: none"> ・枯木又に伝わっている昔話を調べてみよう ・高齢者の語りの録音

(『枯木又をしらべる』1-3, 1975～77年度より筆者作成)

一年目は、彼女たちに身近な生活の事柄に関する調査を行った。二年目は、それらを時系列に整理して枯木又地区と分校の年表作りに取り組んだ。その過程で、年表に入れられないが深めたい調査結果が出てきたため、そのような内容は文集「またたび」に掲載された。三年目には、これまでの調査結果から、「やがてなくなるであろうと思われる昔ばなしを、次代に伝えてゆくためにも残しておきたい」ということで「枯木又に伝わっている昔ばなし」をまとめることにした。「昔ばなし」に着目したのは、子育てにおいて、「良い子にするため」に「吹雪の夜など『やさぶろうばさ』がくるすけえ早く寝なさい」と言って昔ばなしを用いてきたため³⁷、彼女たちの生活に根ざした身近な地域文化だったからである。これらの学習は一年ごとにまとめられ、報告書「枯木又をしらべる」(1～3号, 1975～1977年度)が出来上がった。

この学習は、姑世代にとって「これまでのことを残しておきたい」という思いから、若い嫁世代にとって「地域の暮らしを知りたい」という思いから、進められた。つまり、地域社会の衰退によって生活文化が途絶えるという危機への対抗策を模索する試みであり、過去から未来へ残すべき／受け継ぐべき枯木又の価値とはなにか、彼女たちの生活に根ざして検討する学習であったと考えられる。この学習を契機に、彼女たちはお互いの生活の知恵や技術を学び合うようになった³⁸。女性たちが、「一生活者」(主に嫁、母として)としてこれまでの集落の暮らしのあり様や知恵を意識し、自分たちの生活に即した継承に取り組み始めたのである。

2) 女性たちによる地域づくりとしての文化活動

続いて、彼女たちは地区公民館主事のアドバイスをうけて、婦人学級として調べた成果を「よりわかりやすい方法で表現し、より多くの人たちから見てもらおう」と考え、「枯木又に伝わる、今は消えそうになっている遊びうたを、影絵で表現し残していこう」と決めた³⁹。「自分で調べたことを自分で表現できること」は女性たちの意欲を燃やすものであった⁴⁰。一昔前から今に至る生活のあり方をたどったことで、このままでは忘れ去られそうな遊びうたが、彼女たちにとって枯木又らしい生活を表現するものであったことが意識化されたと考えられる。

地域のお祭りや郡市社会教育大会で影絵発表の機会を得ると、地区公民館主事のはからいで集落の青年に写真を撮ってもらい、その写真を絵はがきにした。青年たちは「母ちゃんたち」の頑張りやいきいきとした活動ぶりに刺激を受けた。周囲から評価される経験を重ね女性たちはますます気合いが入った⁴¹。1980年には、第二作として集落の池にまつわる昔話「龍王様の伝説」の影絵を製作し、地区の催事や婦人学級中越研修会などで上演を行った。のちに、エコの会の行事で母の会として影絵を堂々と上演する姿は、地域住民の昔の生活感情や地域への思いを呼び起こすものであり、地域の年配者は食い入るように見つめ、多くの人々の感動を呼んだという⁴²。

1992年になると、過疎と高齢化によって婦人学級生の人数は13人(平均年齢61歳)に減少し、影絵の操作が困難となった。しかし、地区公民館主事が発表をやめてしまうのはもったいないと動機づけしたところ、「いつも手元にあってひもとける」「離村した人たちにも見てもらえる」「わたしたちの手で残していけるもの」との願いから、影絵を木版画による絵本にすることとなった。1994年に第一作が完成し、そこには、「急激な過疎が進行する山狭の地枯木又が、どんな歩みをしてきたか、どんな生活が営まれてきたか、次の世代にわかりやすく残せる『絵本』として、今後も制作していきたいと夢見ています。」という婦人学級生たちの思いが記された⁴³。このように、彼女たちは状況に柔軟に対応しながら、残していきたい地域の生活文化を表現できる方法を選択し、地域内外の人びとに伝えようとしてきた。

これらの枯木又に伝わる遊びうたや昔ばなしを活かした表現・文化活動は、地域のアイデンティティ的生活文化の価値を絶やさぬよう、共有しやすいかたちで発信した実践として捉えられる。

このように女性たちは、地域の衰退が生活に影響し始めた危機感から、嫁・母という役割にしばられる制約のもとではあるが、その対抗策を模索した。その方法として、女性たちの身の回りの生活文化の歴史を調べたことで、地域の衰退で生活のどのような部分が失われつつあるのか、具体的に意識化せざるを得ない契機を得たといえる。すなわち、現在を生きる自分たちが、枯木又の生活者として何に価値を見出して継承するのか、地域をつくる当事者として迫られる学習であった。過去から未来への時間軸の視点が形成されたことで、次世代に継承する主体としての自己や、地域社会の継承すべき価値を見出すに至ったと考えられる。

3) 青年会と都市住民による都市農村交流の仕組みづくりの模索

1991年に入ると、枯木又の笠置山周辺をゴルフ場、スキー場にするという開発の話が持ちこまれた。地域の年配者から「このままなにもしないのでは枯木又もいずれみんながいなくなってしまうのではないか。しかも今自分達で何かをする力がないのなら、東京マネーを活用するのも一つの方法ではないか」という意見が出たが、青年たちは約20年にわたる都市住民との交流から自然の価値を認識していたため、「山をけずって、後の子供達がなにもできなくなる様なことをするより、この自然を活かした活性化を探りたい。しかも、親父達ほど将来に不安を感じていない」と主張して、話は立ち消えた⁴⁴。

1992年には、最初の「新湧子供の会」との交流から満30年、塾との交流が満20年になったことをうけて、新湧子供会OB・塾関係者の都市住民と枯木又青年会で「交流20周年記念」の行事を催そうという機運が高まった。その際、都市住民側からただの飲み会でいいのかという問題提起があり、青年たちもこの地域で生きていくために何かしないといけないと思っていたため、「行事をするということは一体何なのか」「交流するとは」「地域とは何か」という議論に発展した⁴⁵。この議論は、これまでの都市農村交流が自分たち／地域にとってどのような意味を持つものなのか、どんな可能性があるのか、明確にしようとする作業の始まりと位置付けられる。

議論の結果、「交流20周年記念」の一年を通して集まって、今後の交流や山間地集落のあり方を共に考えていくこととなった。記念事業の立案はA氏が中心的に行い、それまで行われてきた体験活動や地域行事をベースに、都市住民の視点で魅力的な地域資源や生活文化が整理され、13の事業が立ち上がった。

表4 20周年記念事業一覧

①写真絵葉書の発行	⑧龍王祭
②花見と自然観察会	⑨浦和→枯木又リレーサイクリング
③山菜料理講習会	⑩20周年記念パーティー
④バーベキュー大会	⑪小正月行事：さいの神（どんど焼き）
⑤わら細工講習会	⑫手打ちそばの会
⑥盆踊り	⑬自然観察実験池の整備
⑦俳句入門教室	

(枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」1993年3月を参照)

折しも、十日町市ではふるさと創生政策による「まちづくり特別補助事業」として、各地域の振興会・婦人会・青年会や市民活動のための企画・調査・研究に対して費用の補助を行う取り組みをしていた。青年会は「20周年記念行事」を「地域の将来像を探る活動」と位置づけて応募したところ採択されて補助金がおりました⁴⁶。補助金獲得によって、これらの行事は地域づくりの方向性を具体化するための活動と明確に位置づいた。すなわち、この取り組みは単なる青年会と都市住民の個人的交流ではなく地域づくりにむけた活動だと地域内外に示され、それまで関わっていなかった地域住民や都市住民にも開かれる契機となったといえよう。

青年たちは「20周年記念行事」で地域内外の人々と新たな交流を重ねたことで、「この辺の農業の良さや山村の良さを生かした生活をしていければ、まだまだここでやれるんじゃないかと思うし、そういった生活をするのが（略）青年会の活動を通して見えた都市住民の憧れの本体だったんじゃないか」⁴⁷と確信し、枯木又での生活に自信を高めた。つまり、都市住民の視点からみた枯木又の価値を、自然にとどまらず農業や山村の生活文化まで含みこんで捉えるに至ったと考えられる。

特に、青年たちに新たな視点をもたらしたのは、枯木又の生活文化に関する事業（山菜料理、俳句、わら細工、手打ちそばなど）であった。地域の高齢者の熟練した技術や知恵を間近に学ぶ経験をしたことで、これらの技術を今自分たちが継承しなければ絶えてしまうと実感した⁴⁸。それ以前、青年たちは高齢者や婦人学級の生活文化に関わる活動を見かけては漠然と関心を持ちながらも、日常生活で学ぶ機会がなかった。そこで、このような都市住民との交流事業を契機に、地域住民の側も継承するきっかけにしていきたいとの展望を持った。また、俳句会やわら細工講習会では、地域のこどもから高齢者まで多世代の参加者が一緒に楽しめたことや、活動を通して思わぬ人の才能に気付く経験を通して、青年たちは地域内で多世代交流の機会がなかったことを認識した。そして、地元住民と一緒に楽しむために活動すること自体が地域活性化のひとつだと感じた⁴⁹。つまり、青年たちは都市住民や地域の多世代との交流でこの地域ならではの価値を共有し継承することで、人びとがともに楽しんで暮らすことにつながる可能性を見出していた。

このように、生活文化の事業では、自らが生活文化を継承する当事者であるという自己認識や、高齢者の培ってきた高い技術力や子どもたちの新たな側面への気づき、地域への視点の違いなどを人びとが学び合う意義が意識化された⁵⁰。これらの学びにもとづいて婦人学級や高齢者の活動の意義を理解した青年たちは、解散していた「母ちゃん俳句」の会を引き継ぎ、地域の高齢者が持つ技術を継承する活動も恒例行事にした。

この間行われていた地域づくりの勉強会で、都市住民から紹介された山形県朝日町の「エコ・ミュージアム」が青年会でやっている活動と共通している部分が多いということで、青年たちは検討を進めた⁵¹。全国各地でエコ・ミュージアムの取り組みが広がっていることを学び、視察研修や他地域との交流を行ったことで、「外部資本を導入して地域のあり様を全く変えてしまう大規模な開発ではなく、地域の特性を活かし、地域住民が主体となった環境整備的な事業こそが、今必要とされている」⁵²と確信するに至った。その結果、「枯木又エコ・ミュージアム準備委員会」を発足し、エコ・ミュージアムの考え方から特に以下の4点「①建物ではなく、地域である。②収集品の展示ではなく、地域内の自然・文化遺産の発掘・展示である。③訪問者が見学するのではなく、地域住民が研究・利用していくものである。④専門家が主ではなく、地域住民が主体である」に着目して、枯木又におけるエコ・ミュージア

ムの可能性を探ることにした。そして、「エコ・ミュージアム」という枠組みに基づいて「再びこの地域を、青年会みんなで守って行く」と確認し、「地域の人達がその良さを再確認して活力を持って生きて行こう」、そのために「地域の自然、文化、伝統などを掘り起こして活用」していこうと構想し始めた⁵³。以上の展開を通して、青年たちは自分たちが地域づくりの主体であるという自己認識と、都市と比較する視点に加え地域を受け継いでいく視点が重なったことでみえた地域固有の価値を、皆で守り育てていくという地域づくりの展望を明確化したといえる。

4) 小括

第二期は、過疎によって引き起こされた危機的状況と向き合う学習を通して、第一期で形成された同じ属性の仲間集団を基盤に、女性・青年の立場から地域づくりの展望を検討して主体的に地域づくり実践に取り組む段階であった。それぞれが形成した地域づくりの展望とは、女性たちの場合、自分たちの身の回りに即して地域の歴史を調べたことから、絶えかかない生活文化を意識化し、それらを継承・共有するための文化活動を実践して地域のアイデンティティ的文化を伝え残していこうとするものだった。すなわち、過去から未来になにを受け継いでいくか、前の世代から次世代への広い時間スパンで自己の主体性や地域の価値を捉えたことで、自分たちの生活に根ざして地域を本質的に表現する地域資源として地域のうたや昔ばなしが選択されるに至り、地域内外でその価値を広く共有できるよう目指したと考えられる。

青年たちの場合は、地域開発か否かの岐路に立たされ、開発を一旦回避したものの地域づくりのあり方を考えざるを得ない状況になり、長く枯木又に通う都市住民とともに今後の地域づくりの方向性を模索しはじめた。それまでの交流を地域内外の人びとに開いて行ったことで、都市にはない枯木又の価値とは山村の暮らしそのものだとして認識し、地域特性に基づくあらゆるものが地域資源としてとらえられる可能性を見出した。すなわち、都市一農村の空間比較の視点が第一期より明確化しており、農山村が持つ特徴を活かすという地域づくりの展望が具体化した。この視点によって地域資源になりうるものを新たに生み出すことが可能となっており、女性の学習には見られなかった特徴である。

加えて、青年世代は高齢者が持つ技術を次世代に継承できるかどうかの鍵となる世代であること、多世代が学び合い楽しめる活動の重要性に気づいたことで、婦人学級や高齢者の文化活動の意義を実感した。よって、婦人学級と同様の視点、すなわち、地域社会を継承する当事者としての自己や地域で受け継がれてきたアイデンティティ的文化を見出した。それによって、自分たちで枯木又という場所の持つ固有の価値を未来に向けていかに守り育てていくか、という視点が「エコ・ミュージアム」の理念と合致し、地域づくりの展望として総括されたといえる。

このような展望が生み出されたのは、第一期と比して、自己や地域の認識に影響をあたえる時間意識・空間意識が拡張していたからと考えられる。それを可能にしたのは、第一に、地域社会存続の危機が深まり、旧来の地域社会の仕組みの限界が生活レベルで実感され始めたこと、第二に、地域を幅広い歴史的・空間的視点でまなぐ学習活動において、自分たちの生活に根ざしながら地域固有の価値や活動の意義を検討したことが大きいといえよう。これらの学習によって、地域社会のあり方をめぐって、旧来からの封建的規範にのっとった地域経営と立ち行かなくなる農業を出稼ぎと内職で穴埋めするという生活の仕方から、多様な

属性の人びとが主体的に地域づくりに参画することで地域の価値を豊富化し活用するあり方へ転換する機運が青年を中心に高まったと考えられる。

(3) 第三期

以下では、青年会が発案した「枯木又エコ・ミュージアム」をめぐって多様な属性の地域住民が合意形成・参画して、「枯木又エコ・ミュージアムの会」に協同して取り組むに至るプロセスをみていく。ここでは、①地域運営の中心的立場にある年長男性（「父ちゃん」と呼ばれる）、②青年の配偶者にあたる女性たち（「若い母ちゃん」と呼ばれる）が参画するまでに着目する。

俳句やわら細工など生活文化の伝承を意識的に行ってきた高齢者や婦人学級生は、青年たちが地域の持つ価値を継承して地域内外に発信・共有しようとする点において共感するものであったため、若い世代の活動を喜んで「この良き伝統文化を次の世代へ確実に伝える為に、私も全力でお手伝いいたします。」と、当初から協力していた。とはいえ、1990年前後の枯木又の戸数は約20戸と人数的に少ないため、人びとの属性にこだわらず協力し合わなければならない状況となっていた。そこで、いかにして旧来の封建的規範による地域社会関係を越えて多様な属性の住民が協同関係を構築していったのかみていく。

1) 「父ちゃん」衆との協同にむけて

十日町市まちづくり特別補助事業として「20周年記念行事」が採択された時、青年会に地区の20～30代男性が所属しているのに対し、それ以上の年長男性が「世帯主」（〇〇家の「父ちゃん」）として常会の構成員という構図があった。したがって、青年会にとって地域づくりに関わる事柄は常会の理解を得るのが重要であった。そこで、20周年記念年行事の「相談役」として、年長男性から3、4人選出してもらい時々意見を聞かせてもらうことにした。地域づくりの勉強会でエコ・ミュージアムの話を書くときにも同席してもらった。すると、相談役からは「こんなことしてもムダだ」「今の政治体制の中ではなにをやってもダメだから、政治を変えなければうまくいかない」と否定的な意見をぶつけられ、青年会の思いには理解が得られなかった。都市住民と協力していることに対して、「都会の衆に利用されるだけじゃねやんか？」という声が出た⁵⁴。このような発言が出たのは、青年たちより一回り上の「父ちゃん」世代は、高度成長期に突如として農業中心の生活が立ちゆかなくなり出稼ぎせざるを得なくなった経験を持つため、農村は政治・経済に振り回される無力の立場という諦念があったと推察される。父ちゃん衆のこのような意見に対して、青年たちは地域づくりの方向性を主体的に模索し手ごたえを得てきた経験から、「自分達が自立してやって行かなくてはどんな体制になっても頼っている限りダメ」で、「政治や体制が変わらないのなら、まず自分達の方から変わっていく必要がある」⁵⁵と感じていた。この意見の対立は、政治の客体／主体としての自己認識の差異が現れたものと捉えられる。

20周年行事以降も、青年たちはエコ・ミュージアムに向けた取り組みを「市民と語る日」で行政に向けてアピールしたことで再び市から地域整備の財政支援を受けられることになったり、マスメディアに取り上げられる機会が増加したことで地区外の人々から応援や評価される機会を得た。新規就農希望の見学者も訪れるようになった。ある青年会メンバーは地区外からの反響について、「すぐ忘れ去られてしまうのが、過疎地の現状だと思います。そんな中でやはり「ここにいるんだ」という声を出していかないと、道路も相変わらず良くならな

いし、学校などもどんどん統合されてしまって、小さい所、不便な所は悪い所なんだという気持ちに内も外もなってしまう。少なくとも自分達自身、あるいは子供達には絶対にそういう気持ちにさせたくない。」⁵⁶と述べており、自分たちの思いや展望を発信して社会や政治にコミットし続けることが、地域づくりを展開させる重要な方法と考えるようになったのが伺える。

青年たちは、自分たちの目指す地域づくりを実現させる仕組みづくりを進めながら、一方で、地域住民がともに活動することを重視していたため、父ちゃん衆にも自分たちの地域づくりの方向性を発信したり、対話しようと努めた。例えば、「枯木又エコ・ミュージアム準備委員会」が発行する、枯木又地区住民と都市住民にむけた通信「枯木又クォーター」(A3紙1~3枚、年4回発行)を通して、活動の様子や枯木又地区の動きについて知らせた。そこでは、講師役の地元高齢者や参加した都市住民の声、賛同者からの激励、分校の状況や婦人学級の様子に加え、父ちゃん衆へのアピールがなされた。花見大会の記事(vol.1, 1993年)では、「村の中心となり背負って立っている「父ちゃん」達の参加者が多く得られなかったことが残念でした。今の枯木又があるのは何と言っても「父ちゃん」達の力添えのお陰であるし、村を盛り上げる上で決して欠かす事のできない存在だからです。是非とも次の機会には、より多く参加してもらいたいと思っています。」と呼びかけた。お祭りの記事では、枯木又流の盆踊りを披露した父ちゃん衆の迫力ある表現に、「若い衆の学ぶ姿勢にいたらない面があった」「お父さん方の方も伝えるチャンスをつかみそこなっていた」「来年、よいやさ・じんく(盆踊り:筆者注)の講習会でもやんなきゃなあ」と学びたい思いをアピールした(Vol.11, 1995年)。また、集落センターの前に目安箱を設置し、「出来るだけたくさんの方の意見を取り入れてやっていきたい」から「辛口の感想大歓迎」と周知した。青年たちは、父ちゃん衆の力量や経験への尊敬の意思を示しつつ、自分たちの地域づくりの方向性を発信し続け、活動で力を貸してほしいと頼みながら、関わりを持ち続けた。

エコの会結成にあたっては、青年たちは地縁的自治組織との関わりも重要視していることを示し、「枯木又地区の生活基盤に係わることに関しては、常に両枯木又部落会の下承、協力を得るように努めるものとする。また、枯木又部落会あるいは西枯木又部落会が特に反対する事業についてはこれを行わない。」と会の申し合わせに掲げて、地域住民と対話的に活動を行っていく意思を示した。

エコの会設立後は、自然・生活文化に関わる事業に加えて、地域農業の活性化にむけた取り組みも展開されたことで、青年以外の住民にもエコの会の活動との接点が増えていった。例えば、地域住民のつくる農産物や加工品を特産品としてエコの会が買い上げて賛助会員に発送するという住民の収入につなげる活動を始めたり、中山間地政策の農地基盤整備事業では地区で設立された「枯木又地区活性化委員会」にエコの会も協力して当地区の「エコらしい整備のやり方」⁵⁷を模索した。

このように、エコの会が地区内外の支援を得て、自然・文化・経済など多様なアプローチで枯木又地区の持続可能性を高めようとする事業が展開される中で、父ちゃん衆は関心の合う事業に関わったことを契機に、様々な人々と交流して地域の価値を対象化していく学びをするにつれ、「おらどこ(=自分たちのムラ)がこんないいところになるようになった」「連れて行ってもらってありがとう」と徐々に活動の意義を共有し、さりげなく手伝ってくれるようになっていった⁵⁸。当初は「若い衆が好きなお事やってる」と距離を置いていた父ちゃん

衆⁵⁹だが、青年たちが彼らの積み重ねてきた生き様を認めていること、地域住民の様々な考えと折り合いをつけながら対話的に進める姿勢を示したこと、その上で、活動への参画を通して自分や地域のもつ価値を学んだこと、皆で力を合わせて活動することが地域社会のあり方を変革する可能性があると感じていったことで、彼らの活動の意義を理解して協力するようになったと考えられる。

2) 「若い母ちゃん」衆との協同

「枯木又エコ・ミュージアム」の地域づくりを展開する過程で、青年会メンバーが一人で何役も受け持つことは負担であり、地域の戸数・人数の少なさをどう克服するかという問題があった。青年たちは地域づくりの先進例の検討を進める中で、女性が元気なところは地域が活性化していると学び、「一家に一人という考え方や世帯主でなければという考え方を換え、婦人や年配者、若者なども役を受け持つようにしていくことが必要」と、彼らの配偶者にあたる「若い母ちゃん」衆にも活動への参画を求めた⁶⁰。彼女たちにとっては、夫から突然参画を要請されたことになるが、積極的に取り組むようになった。それはなぜだったのか。

彼女たちがエコの会に参画する以前の状況は、年配女性が婦人学級で集まるのに対し若い母ちゃんが地域で参加できるコミュニティが無かったこと、さらに都市農村交流の活動についても、青年会の会議で週に何度も深夜まで帰ってこない夫への不満、行事当日の手伝いを求められて指示されるも「もっとこうしたらいいのに」「そこまでさせるの」「その時だけ手伝いに来てって言われたって、面白くない」と違和感を覚える経験があった。そのため、彼女らにとって夫と一緒に会議に出て運営に参画することは、それらの悩みが解消されることであった。

「枯木又エコ・ミュージアム」では様々な人の個性や視点、培った技術や知恵を重要視していたので、その人らしい関わり方を歓迎するスタイルがあったことは彼女たちの参画しやすさにつながった。例えば、若い母ちゃん衆は、彼女たち以前の世代の嫁が比較的近隣の農村出身であることに対し、都市部からやって来た人たちだったので、都市住民の目線も持ち合わせながら事業運営に意見した。また、彼女たちは慣れない郷土料理を無理して作らずに集落の年配女性にお願いし、山菜の天ぷらやサラダ等自分たちが作れる料理を出すなど「得意なことは力を貸す」ことから始めた。

会議に参加するようになった若い母ちゃん衆は、地域づくりのアイデアも提案するようになった。「子供が増えていく中で子供の遊び場がない」から「集落に小公園がほしい」という思いを実現すべく、「地主には女衆だけで会いに行こう」「女性陣だけで市長さんに会いに行こう」「(花いっぱい運動を)お年寄り達に話を一緒にできないか」という計画を次々と実行した。その結果、後の地域整備では彼女たちの思いも組み込まれた。公園が完成してからは、老人会と公園の維持・管理をするグループを結成した⁶¹。若い母ちゃん衆は、「嫁に来て何もすることがなかったけど、エコが出来てから、自分のいる所を見つけたようで楽しい」と感じていった⁶²。他方、このような女性たちの動きを青年たちは頼もしく思い、誰もが活躍できる場をつくることの重要性を実感した⁶³。

また、女性たちは、エコの交流事業に参加したことで地域の価値をとらえ直す学びもなされた。俳句会に参加した女性は、結婚して枯木又に来たばかりの頃は不便さなど不満が先に立ち、「よく枯木又を見たり、考えたりする事」ができなかったが、俳句会に参加するようになって日常を振り返り、四季のうつりかわりや大地の恵みを味わう喜び、感動を表現するこ

との楽しみを経験して「地域全体が博物館，本当にその通り」と感じるようになった⁶⁴。

このように、単に青年たちの手伝いにとどまらず彼女たちの主体性が発揮されたのは、エコの会の運営や活動を通じて地域社会で孤立していた若い母ちゃん衆がつながり、ほかの地域住民や都市住民と学び合いの関係を築くことで、嫁の役割だけに縛られることなく地元住民／移住者／子育て世代など様々な視点を持つ存在として参画できたことが重要であったといえよう。女性が地域のことに意見したり参画することは、彼女達の前の世代まで行われていない点で大きな変化であった。若い母ちゃん衆が地域社会について発言し行動する場ができたことを、彼女たちが居場所だと実感している点は注目すべきである。それが可能だったのは、エコの会では多様な人々がそれぞれの視点から枯木又を活かして楽しむという地域づくりコミュニティを目指していたため、自分が感じたことを言い、得意な部分で関わることでできたからである。それによって、女性たちは自分らしい地域づくりへの関わり方を積極的に作り出した。「枯木又エコ・ミュージアムの会」がこのような特質を持つコミュニティとなったことは、若い母ちゃん衆に限らず、様々な立場から関わった人々にとって同様の意義があったといえよう。

3) 枯木又住民と都市住民の協働型組織「枯木又エコ・ミュージアムの会」の結成

以上、青年たちは様々な属性の地域住民と地域づくりにむけた協同的關係の構築を進めていった。その過程で、「父ちゃん」衆が徐々に意義を感じて協力しつつあることや「若い母ちゃん」衆の活躍を目の当たりにしたことで青年たちは「地域の方全員で進めてゆく事が枯木又の活性化又、存続につながっていく」という思いを強めた⁶⁵。

1995年の春、「枯木又エコ・ミュージアムの会」の結成時、地区全戸である17世帯86人が会員となり、地区外会員を含め約150名でスタートをきった。運営の中心は青年会のメンバーだが、エコの会は青年会の延長ではなく、地元住民・都市住民の老若男女が力を合わせて「これからも共同でやって行くんだという事を、内外共に鮮明にしておきたい」意思表示として、役員は様々な属性の人びとで構成され、会の代表は塾経営の新潟子供の会OBであるA氏が担うこととなった⁶⁶。また、青年会メンバーや若い母ちゃん衆がエコの会で地域活動に取り組むようになったため、まもなくして青年会と婦人会は発展的解消となった。すなわち、従来の年齢・性別によって分けられていた地縁集団が解体され、対等に地域づくりに参画できるエコの会へと住民集団が再編されたといえよう。

エコの会の基本的な活動としては、「20周年記念行事」の際に位置づいた地域行事や交流イベントが恒例となって毎年行われているが、様々な会員の発案した企画や地域資源の開発が随時加わりながら、現在まで地道な活動が続いている。また、中越地震での甚大な被害や分校の閉校などの危機的局面では、地域内外が力を合わせる協同的關係を基盤にして乗り越えてきた。枯木又ではエコの会の存在によって、過度に外部から振り回されることなく自律的な地域づくりを達成していると捉えられる。

一見するとゆるやかに枯木又の人口減少は続いており、現在は8戸の小さな地域ではあるが、枯木又は多様な人々の自分らしい参画を掛け合わせた協働によって形成され続けてきた場といえよう。

4) 小括

第三期では、枯木又の様々な属性の地域住民が、青年たちの提起した地域づくりの展望を共有し実践に参画する過程を見てきた。枯木又の地域特性を継承し活かしていこうとする点

において、婦人学級の女性たちや高齢者による生活文化を継承する営みがエコの会の取り組みに包摂され、いち早く協同して事業を行った。

第二期で形成された地域づくりの展望を実現しようとする青年たちは、彼らの考えを地域内外に発信し、その反応を得たことで、社会的に意思や要望を示すことの意義を学んでいた。また、都市との交流で顕在化した地域資源を活用する事業を展開していき、経済的な持続可能性を高める取り組みも行うようになった。

とはいえ、地域社会の中心層でありながら地域づくりへの無力感があつた年長男性にとって、青年たちの活動は支持しがたいものだった。しかし、行政をはじめ多くの人々の支援を受けて活動が幅広く展開されたこと、青年たちが対話的に彼らの意思を尊重してきたことでようやく事業に関わると、青年たちが都市農村交流で経験してきた学びを彼らも追体験し、活動の意義に共感したと考えられる。

他方、青年世代の配偶者にあたる「若い母ちゃん」衆は、地域社会の最も周辺に位置しており、そもそも地域活動に参画したり意見する回路を基本的に持っていなかった。青年たちにとって、中心層に理解されなければ地域づくりを進めにくいことや、人手が足りないという実践上の理由があつたものの、様々な視点や経験から枯木又らしい地域資源を作り出し共有・継承することを地域づくりの主たる方法としていたため、地域社会の権力構造の中心一周縁という真逆に位置するような立場すら超えて誰もがその人らしく参画することを求めて彼ら・彼女らにアプローチした。そして、両者は活動に参画した際、自分らしく地域づくりに関わることの楽しさや意義を実感していき、自分の視点や経験を評価するエコの会を受け入れるに至った。つまり、青年たちが、周囲の住民をエンパワメントしていくことで、協同的關係が形成されたと考えられる。こうして、エコの会は地域内外の様々な属性の人びとで協同する実践コミュニティとなったといえよう。この段階において、地域住民にとって「枯木又」という場は属性問わず様々な人びとの手で協同して守り育てる場として位置づけ、エコの会は「枯木又」の持続可能性を高める多種多様な活動を生み出す基盤となったと考えられる。

3. 考察

以上、枯木又の事例において、地域社会の周辺層である女性や青年が学習活動を通して地域づくりの主体として形成されていく過程と、彼／彼女らが見出した地域づくりの展望に基づく実践を通して住民の協同的關係が形成される過程をみてきた。上記の分析結果に即して、本稿の課題について考察していく。

第一に、地域社会の周辺層の地域づくり主体形成において、「諸事象の自分事化」を可能とする学習の条件は次の通りである。前提として重要だったのは、同質の属性の仲間づくりであった。婦人学級の参加者は、話し合いや生活記録文集づくりを通して生活の不満や地域の良さを語り合える信頼関係を築いていた。青年たちは、都市住民との交流など生活の楽しみを共有する関係を築いていた（第一期）。特に女性たちは封建的規範の制約が強く地域社会で孤立しがちであったため、地域社会で要請される役割に基づく苦勞や喜びを共有する経験によってはじめて、同じ属性の認識枠組みや規範の共通性が確認されたといえよう。

その関係を基盤に、「当事者意識の醸成」と「独自の価値観の再構築」において重要な「諸事象の自分事化」の学習がなされた重要な局面は、旧来の地域社会の仕組みの限界が明らかとなった第二期であった。そこで行われた学習とは、第一期のように「今・ここ」にある地域社会の日常を対象化するのみならず、都市—農村という空間軸、過去から未来への時間軸の視点を拡張させて、自身の日常（身の回りの生活）と関連づけながら地域の価値を問い直すものであった。

婦人学級では、自分たちの身の回りに即して地域の歴史を調べる学習活動が行われた。それは、衰退する地域の下で消えそうな生活文化が対象化され、自分たちの生活に根ざしたもので何が未来に継承すべき価値か模索する学習であった。彼女たちは遊ぶうたや昔ばなしに地域らしい価値を見出したことで、文化活動を通してその価値を地域内外に発信するに至った。このように、地域のアイデンティティを体現すると思うものを次世代に伝えることが、彼女たちの地域づくりの展望であった。集团的に過去から未来への時間軸の視点を獲得したことは、「現在」の自分たちが受け継ぐ役割に立っていると迫られる。それは、地域のアイデンティティ継承という点において当事者意識が高まる契機であり、このような観点から地域の生活文化をまなぐすという点で「諸事象の自分事化」が起こっていたといえる。

青年たちは、都市住民との交流を楽しむ中で、都市の視点から浮かび上がる地域固有の価値や資源の存在を知ったこと、地域の価値がわかると住民に自信がつくと意識化したことが起点となった。しかし、それだけでは地域づくりにむけた活動が生み出される十分条件ではない。そこから、都市農村交流が自分たち／地域にとってどのような意味があるか検討し、それまでの個人的交流を地域内外に向けて試行したことで、様々な地域資源の活用方策を具体的に見出すことができた。加えて、地域住民の培ってきた技術を通した多世代交流で、自分たちの世代が生活文化の継承の要であるという、時間軸の視点からの当事者性も獲得した。そして、互いの持つ力量や視点を楽しんで学び合う機会をみんなで共有するには、様々な住民が自分らしく参画することが不可欠であり、それにより、地域づくりの主体として誰もが意見を述べたり参画することの意義が確認された。

このように青年たちは、都市—農村という空間軸の視点から地域特性を意識化したのみならず、継承すべき価値を検討しようとする時間軸の視点を獲得したことで、「都会にはない価値」が自分たちの生活にとってどのような意味を持つか深めることができ、多様な人びとの視点が地域資源を浮かび上がらせたり、その人の生き様そのものが地域資源であるという認識を得て、多様な住民と協同する論理を生み出した。したがって、婦人学級や地元高齢者の活動が青年たちの構想するエコ・ミュージアムの地域づくりに包摂されたと考えられる。また、青年たちは時間軸だけでなく都市—農村の空間軸の視点があったことで様々な地域資源を掘り起こすことが可能であったため、アイデンティティの継承のみならず地域の持続可能性を高めるために柔軟に地域資源を創造することも可能であったといえよう。

以上をふまえつつ、第二に、場の構造を作り変える学習実践の展開論理を検討する。

まず、第一期から第二期にかけて確認できたのは、IKPとして場の構造の変容の起点を担う集团的主体の形成であった。事例の検討から、前提条件として、特に周辺層においては同じ属性の組織化を位置づける必要が明らかとなった。その上で、時間・空間的視点を拡張させて自身の生活をまなぐす学習によって形成された新たな認識枠組みから地域社会の価値を集团的に検討することで、地域づくりの展望を提起するに至るというプロセスが確認できた。

以上が、周辺層がIKPとして新たな活動を起こすに至る条件である。

その上で、周辺層だけで活動すれば自動的にほかの住民も認識を転換させて場の構造が変容するわけではないことも明らかとなった。それは、事例の第三期から読み取れる。青年たちが地域づくりの展望を提示したとき、年長男性とのあいだにコンフリクトが生じた。構造としての場が人の制約要因として機能していたといえる。青年たちの活動は市の補助金という「公的承認」があったものの、それだけで地域住民相互の認め合いが起きるとはいえなかった。なぜなら、年長男性は地域づくりや政治において客体としての自己認識を形成していたためであった。青年たちは、彼らのおかれた状況や地域認識について自覚的ではなかったが、行政や社会に発信して地域づくりの展望を実現するための条件整備をしながら、年長男性に対話的な関わりを粘り強く続けて活動に参加してもらい、青年たちの学びを迫体験させたことで、彼らに活動の意義への理解を得ることが可能となったと推察される。また、青年たちが第二期で他者の視点や人生経験の総体を価値あるものとしてとらえていたことで、考えが異なる他者ともつながる必然性が生まれており、よってどのような人びとも対等に対話的であろうとしたことも、協同関係を構築する上で欠かせなかったといえよう。このような地域住民への認識が形成されていたことで、地域社会のもっとも周辺に位置づいて孤立化していた青年会の妻である女性たちも、多様な関係性の構築を足掛かりにして、主体的に地域社会に関与していくことが可能となっていた。このように、IKPが属性の異なる住民もエンパワメントして、ともに活動する主体としての関係を形成していくことで、場の構造が停滞のサイクルから活性化へと転換していくと考えられる。

さらに、本事例では地域内の様々な属性の住民の協同に加え、都市住民との協同関係の形成も可能となっていた。それは、「エコ・ミュージアム」の地域づくりを見出していく段階（第二・三期）において、「枯木又」の持つ価値が地理的空間のなかに閉じられて発揮されるのではなく、都市—農村という空間的広がりをもって捉えることで価値が浮かび上がってくると地域住民が確信していったからだと考えられる。よって、地元外の人々とも協働して「枯木又」の価値を守り育てるのが重要との理解に至ったといえよう。それゆえエコの会では、どのような属性の者でも、地域の持続可能性を高めるのにつながるならば、地域資源を利活用することが合意形成されていた。この段階の「枯木又」という場は、もはや単なるエリアではなく、枯木又に関わるあらゆる人々の物語が埋め込まれる場であったと理解できる。

枯木又の事例から示されたのは、「場の教育論」の精緻化において、地域社会が「停滞のサイクル」から脱するために場の構造を変容させる焦点とは、旧来の地域社会に即して形成された場を、より広い時間的・空間的視点で見出した価値を基軸に再構成するIKPを形成すること、IKPがほかの人々のエンパワメントを支援する関わりをすることで、地域づくりにむけた住民の関係性が対話的・協働的なものに再構成されることであった。本事例では、従来の地域づくり論が直接的に地域社会の構造的変革を志向しているのに対し、地域をより広い時間・空間の視点から問い直し、多様で自由な認識を受容する場をつくりだし共有することで地域資源や地域に関わる人々を豊富化し、持続可能性を高めていく方策がとられていたといえよう。

4. おわりに

本事例の分析からいえることは、第一に、都市農村交流を通して自己や地域をまなざす空間軸の視点が拡張することで、潜在化していた地域資源をほりおこす視点が形成されること、地域史学習を通して時間軸の視点が拡張することで、未来に向けて地域社会を守り育てる当事者性が形成されたことである。その際、ともに鍵となる条件は、自分自身の身の回りの生活や実感に即して学習することであり、それによって「諸事象の自分事化」が可能となり、旧来の認識枠組みを超えた地域づくりの展望が形成されていたと考えられる。

第二に、以上の学習に基づいた地域づくりの論理が要請する住民関係についてである。地域が持つ価値とは多様な視点があることで豊富に浮かび上がると理解されたこと、この地域に生きてきた人・関わる人の視点や技術、経験など総体的な生きざまを認め合い学び合う意義が確認されたことで、誰もが対等な立場から参画し主体性を発揮できる地域づくりの必要性が導かれた。そのためには、客体化された人々をエンパワメントするような関わりも求められ、それこそが地域づくりにむけた住民の協同形成の契機で、ひいては場の構造が停滞のサイクルから転換していく条件であったと考えられる。

本稿では、交流を通じた都市住民のエンパワメントや協同的な活動の展開までは明らかにできなかった。今後は、各主体の形成過程をより詳細に明らかにすることに加え、地域社会の周辺層やマイノリティを置き去りにしない民主的な地域づくり実践の内実についての知見を蓄積していきたい。

注

¹ 総務省地域力創造グループ過疎対策室「平成29年度版過疎対策の現況」2018年12月。

² 石破茂「地方創生の推進について」『第二回国と地方の協議の場』内閣官房、2013年10月21日。

³ 保母武彦「地域社会の貧窮と荒廃はどこまで進んでいるのか」『日本の科学者』Vol.43, No.11, 2008年。小田切徳美『農山村再生に挑む』岩波書店、2013年。

⁴ 佐藤一子編著『地域学習の創造』東京大学出版会、2015年など。

⁵ 「特集：地域にこだわり、地域に生きる」『月刊社会教育』国土社、1992年5月号。

⁶ 安達生恒『過疎地再生の道』日本経済評論社、1981年。乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』富民協会、1996年。

⁷ 小田切徳美、前掲。

⁸ 「インタビュー “そこにあるもの” から始める地元学」『月刊公民館』2006年12月号。小栗有子「「奄美遺産」の地元学的展開の提案～その理由と目的～」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』10巻、2013年。

⁹ 徳野貞雄「農山村振興と都市農村交流活動の類型化」『文学部論叢』96, 2008年。河本大地「「都市農村交流」を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方」『神戸夙川学院大学観光文化学部紀要』(5), 2014年。

¹⁰ 岩崎正弥・高野孝子『場の教育：「土地に根ざす学び」の水脈』農文協、2010年。pp.28～30, p.157～158。

¹¹ 岩崎、同上。pp.156～163。

¹² 岩崎、同上。pp.172～187。

¹³ 岩崎、同上。pp.29, 157～158。

¹⁴ 『デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究』新潟県教育委員会、新潟大学社会教育研究会、十日町市教育委員会、1965年2月。『出稼ぎ農民とその家族の生活—へき地山村の社会調査』十日町市教育委員会、新潟大

学社会教育研究室, 1966年2月。

- ¹⁵ 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」。
- ¹⁶ 当重益郎想い出編集委員会「不利な条件を有利な条件へ 当重益郎の想い出」1999年。閉校記念誌「枯木又」2006年。
- ¹⁷ 1965年度「十日町市青年学級・婦人学級・家庭教育学級計画書」。
- ¹⁸ 婦人学級生M氏への聞き取り(2015年8月10日実施)。
- ¹⁹ 十日町市公民館「わらばし通信」No.3, 1978年。
- ²⁰ 「ゲームでオホホ, アハハと皆んなを笑わせ又色々ためになるお話を聞かせたり, 私共の意見もきいて下され…(略)。(枯木又婦人学級「またたび」1号, 1965年)
- ²¹ 枯木又婦人学級「またたび」1号, 1965年。「またたび」2号, 1966年。
- ²² 「皆ながもうちょっと人の身みなって考えてからいろいろ云った方がい々と思うどもの…」(「またたび」2号, 同上)
- ²³ 枯木又婦人学級「またたび」6号, 1976年。「またたび」9号, 1979年。
- ²⁴ 枯木又婦人学級「またたび」6号, 同上。「またたび」7号, 1977年。「山の灯:第二集」1979年, 「またたび」13号, 1985年。
- ²⁵ 田村達夫『「豪雪と過疎と」その後』全日本社会教育連合会編「社会教育」, 1977年11月号, 「またたび」7号, 同上。「山の灯:第二集」同上。
- ²⁶ 当時「新潟子供の会」では様々な地域に入り込んで体育教室や子ども会づくりの手伝い等, 子どもとの交流を中心としたボランティア活動を行っており, その一つとして枯木又への慰問が行われた。
- ²⁷ 兼松芽永「「循環する場所」としての枯木又一エコ・ミュージアムとノから大地の芸術祭へ」2012年度みんぱく若手研究者奨励セミナー 報告資料。
- ²⁸ 枯木又婦人学級「またたび」1号, 1965年。
- ²⁹ 「枯木又クォーター」Vol.95, 2016年。
- ³⁰ アグリネクスト編集部, 『「農の世界」を耕す: 発想転じて大発見。』ローカル通信舎, 1998年, p.53。
- ³¹ エコの会Y氏への聞き取り(2019年8月8日実施)。
- ³² エコの会Y氏への聞き取り。
- ³³ 十日町市辺地調査プロジェクトチーム「辺地調査報告書」1974年。
- ³⁴ 枯木又婦人学級「またたび」1号, 前掲。
- ³⁵ 枯木又婦人学級「枯木又を調べる」1-3(1975~1977年度)。
- ³⁶ 「枯木又を調べる」1号, 前掲。婦人学級生K氏への聞き取り(2015年8月12日)
- ³⁷ 「枯木又を調べる」3号, 前掲。
- ³⁸ 婦人学級生K氏, M氏への聞き取り, 前掲。「枯木又を調べる」2号, 前掲。
- ³⁹ 十日町市公民館設置60周年記念事業実行委員会「十日町市公民館60周年記念誌」2009年。田村達夫, 前掲。「市報とおかまち」1994年7月10日。
- ⁴⁰ 「市報とおかまち」8月号, 1978年。また, 作業の後のお茶会では, 作業の中でうまくやった人に声をかけあつて互いの労をねぎらった。また, 家のことに関する愚痴などをおしゃべりし, 日々の息抜きとしても大きな場であったという。(婦人学級生M氏への聞き取り)
- ⁴¹ 枯木又集落住民O氏への聞き取り(2015年8月12日実施)。
- ⁴² 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」。
- ⁴³ 枯木又婦人学級『枯木又のうた』1994年。
- ⁴⁴ 「枯木又レポート」1, 十日町市タイムス, 1992年5月18日。
- ⁴⁵ アグリネクスト編集部, 前掲。
- ⁴⁶ その計画では, 「都市住民との交流の幅を広げる」「地元の若者や子供たちに文化を受け継ぐことを目指して, 自然を生かす地域づくりの可能性を調査・研究するという目的を掲げた。

- ⁴⁷ 「枯木又レポート」12, 前掲, 1993年4月18日。
- ⁴⁸ 「枯木又レポート」4, 前掲, 1992年8月20日。「枯木又クォーター」Vol.2, 1993年。
- ⁴⁹ 「枯木又レポート」9, 前掲, 1993年1月19日。
- ⁵⁰ 枯木又青年会「平成4年度まちづくり特別補助事業 地域づくり計画報告書」1993年3月。
- ⁵¹ 「枯木又レポート」8, 前掲, 1992年12月18日。
- ⁵² 枯木又青年会「平成4年まちづくり特別補助事業地域づくり計画報告書」, 前掲。
- ⁵³ 「枯木又レポート」35, 前掲, 1995年3月18日。
- ⁵⁴ 「枯木又レポート」4, 前掲。「枯木又レポート」10, 前掲, 1993年2月18日。
- ⁵⁵ 「枯木又レポート」4, 前掲。
- ⁵⁶ 「枯木又レポート」37, 前掲, 1995年5月18日。
- ⁵⁷ 「枯木又レポート」57, 前掲, 1997年1月18日。
- ⁵⁸ 「枯木又レポート」63, 前掲, 1997年7月18日。「枯木又クォーター」Vol.16, 1997年。
- ⁵⁹ 「枯木又レポート」63, 同上。
- ⁶⁰ 枯木又青年会「平成4年まちづくり特別補助事業地域づくり計画報告書」, 前掲。
- ⁶¹ 「枯木又クォーター」Vol.7, 1994年, 「枯木又レポート」27, 前掲, 1994年7月18日。
- ⁶² 「自然と共に, 枯木又エコミュージアムの夢」十日町タイムス, 1996年1月8日。
- ⁶³ 「枯木又レポート」27, 前掲, 1994年7月18日。
- ⁶⁴ 「枯木又クォーター」Vol.19, 1997年。
- ⁶⁵ 「枯木又レポート」35, 1995年, 前掲。
- ⁶⁶ 「枯木又レポート」37, 1995年, 前掲。

Cooperation of Community residents for Community Development of Depopulated Areas

—A case Study of Mountainous area, Karekimata, in Tokamachi-shi, Niigata Prefecture—

YOSHIDA, Yayoi

Key words

Depopulated Areas, Community Development, Cooperation, Eco-museum, Livelihood Culture

Abstract

The aim of this paper is to consider the condition of producing cooperation for depopulated area's community development by people. For this project, this study grasps the facts of learning of "Personalization of phenomena" suggested by Masaya Iwasaki(2010), and the logic of the practice for restructuring "structure of the field" suggested by him.

In this paper, I focus on the process of forming organization for the purpose of community development, "Karekimata Eco-museum Group" in Tokamachi, Niigata. Through the analyses, two main conclusions are indicated, as follows. Firstly, expanding a perspective on the self and the community spatially gains a fresh perspective to find local resources. Also, expanding a perspective on them temporally encourages people's independence as the actor of community development. These are produced by learning corresponded to reality of people. Secondly, these learning lead people to know a significance of diversity and identity by learning from each other. Additionally, lead people to share the vision of community development which everybody can participate as equals. For such occasions, people need to empowerment objects like peripheral people. This is the moment of forming cooperation for depopulated area's community development.

